



搾乳ロボットの導入による ていねいな飼養管理で 安定した酪農経営へ

酪農において、搾乳は労力が大きい作業である。今回は、搾乳ロボットの活用により労力を低減し、ていねいな飼養管理を行っている生産者を紹介する。

搾乳ロボットの活用

現在の飼養規模は125頭（内搾乳頭数61頭）で、フリーストールで管理している。また、一部の後継牛は預託に出している。

泌乳牛の飼料はTMR方式で、配合飼料、チモシー、オーツ、ルーサン、自家産のラップサイレージを給与。購入粗飼料は、価格情勢を見てより安い飼料を給与するように心がけている。また、乳脂率を安定させるために添加物として重曹などを使用している。

農場全体の出荷乳量は1日当たり

およそ1900kg。バルク乳の乳脂率は安定して3・8%程度を維持している。搾乳牛61頭の内、47頭は搾乳ロボットを使用。残り14頭は搾乳ロボット内に入らないなど、体型が適さない牛である。

搾乳ロボットによる搾乳回数は1日1頭当たり平均3・2回、最大4回行われている。

残り14頭の搾乳やTMR給与も含めた作業時間は、朝夕約2時間ずつとなっており、農場主は「搾乳にかかる労力が低減されて、その分牛をよく見ることができるようになった」と話す。

フリーストール管理と定期的な削蹄

元々は繋ぎ牛舎であったが、後継者が戻ってくることもあり数年前に搾乳ロボットを導入したフリーストール牛舎に建て替えた。牛舎は屋根が高く換気がよい。建て替え直後は牛が慣れていないこともあり、搾乳ロボットがうまく機能しないなどトラブルもあったが、北海道からの初

妊牛の導入や自家育成による牛群の更新により、安定した成績を残せるようになった。あまり大きな牛、小さな牛は搾乳ロボットに適さないため、血統には注意している。牛舎は非常に清潔に管理されている。1日3回オガ粉を交換し、スクレイパーで除糞も行う。以前はスクレイパーに牛が挟まってしまっ

のトラブルが発生していたが、運転速度を調整することで解決した。また、以前は蹄病が頻発していたが、削蹄を定期的に行うことで蹄病が大きく低減した。

安定した自家育成をめざして

元々は北海道からの初妊牛の導入も行ってきたが、発情発見用歩数計などの活用により繁殖成績が向上してきたため、今後の更新はすべて自家育成で行っていく方針だという。人工授精に加えて現在、受精卵移植の技術習得に取り組んでいる。

今後の目標について、「今は規模拡大よりも、まず安定して1日当たり2000kgを出荷できるようにしたい。そのためにもまだまだ勉強することはたくさんある」と話す。

DATA 事業規模

所在地：関東地方

飼養頭数：125頭（搾乳頭数61頭）

従業員数：4名

搾乳ロボットの導入



搾乳ロボットを使用した搾乳の様子



搾乳ロボット入口で待機している牛

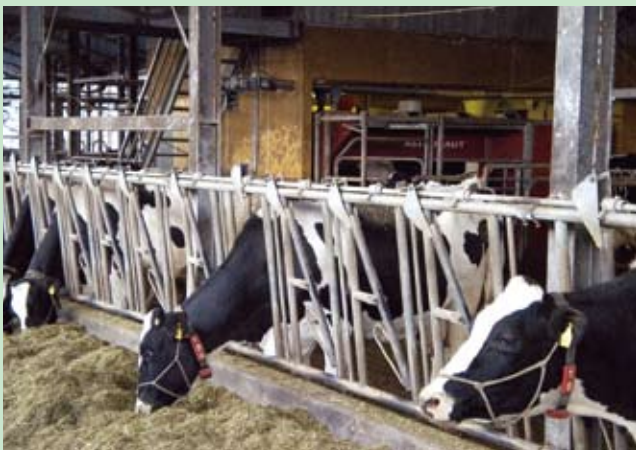
ていねいな飼養管理



換気をよくするため、天井を高くし換気扇を設置した牛舎



1日3回オガ粉の交換をしている清潔な牛床



飼料は配合飼料とTMRを給与



1日3回お湯を交換し、タンクを暖房代わりにしている

平成23年2月と平成22年2月の成績比較

	乳量 (kg)	乳脂率 (%)	タンパク質率 (%)
平成22年2月	28.2	3.87	3.30
平成23年2月	31.5	3.95	3.50

Point!

- 搾乳ロボットの導入により、搾乳にかかる手間が低減
→ 牛床を頻繁に交換するなど、ていねいな飼養管理を実現
- カウコンフォートを意識した牛舎構造
- 積極的な削蹄師の活用による蹄病コントロール